空間・社会・地理思想 5号 2-9頁，2000年
Space, Society and Geographical Thought

「空間」と「持続」
—アンリ・ベルクソンにおける空間と主体について—

和泉　浩*

1　「空間」と「持続」の問題

社会理論、地理学などにおいて、空間の重要性が改めて認識されるようになっている。しかし、問題になっているのはどのような空間なのであろうか。しばしば引用されるアウグスティヌスが時間について語った言葉、「もし誰も私に問わなければ、私は知っている。もし問う者に解き明かそうとすれば、私は知らない」を、ここで空間についてもあてはまるものとして繰り返してみたくなる。しかし、アウグスティヌスの思索が、近代における主体と時間とのかかわりを示す端緒に位置づけられるのだとすれば、空間において問われるはこの関係にほかならない。フーコーが、「現代はとりわけ空間の時代であろう」と述べることになったのは、まさにこのような問題においてではないのだろうか。

本稿は、この主体と時間、さらに空間とのかかわりを、アンリ・ベルクソンの『時間と自由－意識に直接与えられているものについての試論－』(1889) [1]における議論をもとに、そこからの展開の可能性を探る試みである。ここでベルクソンについて取り上げるのは、主体と客体にかかわる二項対立的な諸概念を、時間と空間を通して、さらにモダニティと呼ばれる社会とのかかわりにおいて考えるための重要な手掛かりになると考えるからである。

このベルクソンの『時間と自由』で中心になっているのは、「持続」と「空間」の二分法であり、それは「主観」と「客観」に一致するものと考えられている。「持続」とは絶えず移ろいゆくもの、客体的な構造としての「空間」によるいかなる規定からも逃れ去るものであるため、「一般的なもの」としての言語にもたらすことの不可能な、いわば主体のもっとも根源的な層をなすと考えられるのである。このため、「持続」と「空間」の二分法は、「思惟する物」と「延長せる物」というデカルトの限界にとらわれたままであると言われることになる。しかし同時に、「持続」は、経験の前言語的な層をなすと考えられることで、主体と客体の二元論を乗り越えようとする試みにおいて問題にされることにもなるのである。特に構造決定論的な理論を批判し、主体の実存、あるいは構造が生産され、再生産される契機を問題にしようとするアンソニー・ギデンズらの社会理論において、とりわけその時間的な特性に焦点があてられている [2]。ここにおいて「持続」は、主体であるともに前言語的領野とされることで、その位置がきわめてあいまいなものになる。

この「持続」の両義性は、ベルクソン自身が「持続」という定義上「概念」においてはとらえがたい存在をさまざまな例を用いながら説明し、「空間」との関係を述べてゆくなかでもあらわれる。この過程で、「持続」と「空間」、「主観」と「客観」という２つの二分法の関係がしばしば錯綜してゆくのである。まさにこの点において、二元論にかかわる問題とともに、これまで一致すると考えられてきた、この「持続」と「空間」、「主観」と「客観」という２つの二分法が必ずしも完全に一致するものではないことが明らかになり、「持続」についての異なった理解の手掛かりを得ることができるのではなかろうか。しかし、このことは二元論的枠組を単に無効にすることにはつながらないであろう。つまり、「持続」と「空間」といったような二項対立的な諸概念への批判において、それらを構築する何

* 東北大学文学研究科院生

らかのより根源的な過程へとそれらを還元することがここでの目的ではない。このような区分がどのように構成され、さらにそのことによって生じる問題こそ明らかにされなければならないのである。

2 「空間」

ベルクソンは、「持続」を「空間化された時間」への批判において考えている。つまり、「持続」と「空間」という二分法は、数的なものにおいてのみとらえられる傾向にある多様性を、「質的多様性」と「数的多様性」という二つの多様性に区別することに基づいているのである[3]。したがって、ベルクソンの「持続」の概念は、従来の時間と空間の概念両者の批判において、つまりその両者が実は「空間」にほかならないという批判において考えられているという点には注意を要するであろう。ベルクソンはこのことについて次のように述べている。[数的多様性における]「等質性とはすべての質の欠けているところに成り立つのであるから、等質的なものの2つの形式がどうしてお互いに区別がつくのかわからなくなる」、「しかしそれにもかかわらず、時間を、空間とは別物ではあるが、それと同様に等質な、無規定の環境とみなす点で、人々は一致しているのだ。こうして等質性は、それをみたすものが共存かそれとも継起であるかにしたがって、二重の形式を身につけるようになる」(Bergson 1889: 73＝1990: 94)。

「空間」への批判において「持続」は、この語の選択からも明らかなように、不可避的に時間的なものの含意を持つことになる。しかしながら、問題になっているのが「空間」という形式、多様性の数的構成原理であるため、「持続」を単に時間のある特定の性質に還元することももはやできないことになる。このために、「持続」の概念はとらえがたいものとなり、問題が生じることにもなるのである。

ベルクソンのいう「空間」とは、「動きそのもの」を「空間」上の「動体の軌跡」に翻訳してとらえることを意味する。この翻訳によって、動きそのものが持っていたはずの個別的相違は捨象され、「共通の機能」のみが考慮されることになる。この軌跡であるとともにそれを位置づけるものとしての「空間」が「数的多様性」であるのは、相互に切り離すことのできる「部分」としての同一的な「単位（ユニテ）」と、その単位を含む「総和」としての「単一性（ユニテ）」という二重のユニテの綜合として「空間」が構成されているからである[4]。それぞれの単位は「数」における存在であることによって、「空間」のなかの区別ある場所を占める「点」に翻訳され、その点と点との間の「空隙」によって個別的なものとしての位置を得るのである。しかし、この単位の個別的なものとしての不可分性は、その延長としての性質がそのときの「関心」に利用されていないことによってもたらされる暫定的なものにすぎない。つまり、単位とは常にさらなる分割、あるいは加算が可能なものとして存在し、その存在はもう1つのユニテによって支えられているのである。さらに、この総和としてのユニテ自体が、「単一の直観」によって表象され、それに「一つの名」が与えられることによってもたらされたものである。つまり、このような形で存在する「空間」とは、単にそのなかに存在する点、単位相互によって、あるいはそれらの単位を規定する関係によって作り出されているのではなく、それらが存在可能になるのは、「1つの名」による「空間」の構成においてである。

このように数として構成されることで、「任意の解体にかなう」延長としてとらえられた対象は、分割されても性質の変わらないものとなる。つまり、「空間」のなかに位置づけられた対象は、他のすべてのものは同一のまま、「それだけを切りはなして結晶化させ」ることができると考えられるのである（Bergson 1889: 6＝1990: 22)。この「結晶化」された対象は、その特性がさまざまに分類されたり、あるいはそれじたいが解体されることになろうとも、その客観的存在は存在し続けると見なされる。このことからベルクソンの「客観的なもの」の定義は、無限に分割可能であるにもかかわらず、そのことによってそれじたいの性質が変わらないものということになるのである[5]。このため、「客観的なもの」には、現在の分割において知覚されている以上のものが常に存在しているが、この「それ以上」において何かそこに現われているものと異なったものが存在しているのではなく、このことにおいてその客観的存在が示されることになるのである。つまり「客観性」とは「空間」におけるこのような対象の存在を意味することになるのである。したがって、「客観的な

もの」についての認識は、必然的に不完全なものとならざるをえないのだが、まさにこの恒常的な不完全性を通して可視化される対象それ自体の存在によって、「空間」は「客観的なもの」を構築し、認識するための多様性の形式になるのである。

この「数的多様性」における均質化は、単に画一的な「一つの理想的空間」(Bergson 1889: 57＝1990: 76)を生み出すだけでない。それは、包含関係、大小による配列によって、そのなかに位置づけられる対象の秩序を生み出すのである。「空間」は対象を分割可能にするだけでなく、加算し、1つのユニテをなすものとしてとらえることを可能にする。分割によって損なわれることのない対象の客観性とは、このことを前提にしているのである。したがって、「空間」によってもたらされる問題において、単に「均質化」に対して「多様性」を対置させればいいということにはならない。ある種の多様性（おそらく最もとらえることが容易な類いの多様性）は、まさに「空間」が構築されるということにおいてのみ可能になり、したがって、多様性の性質こそ問題にされなければならないのである。ここにベルクソンの「持続」の探求の意味が存在するのである。

3 「持続」

ベルクソンは「持続」において、以上のような「空間」の構成からは逃れ去ってしまう、数的でない多様性、つまり「質的多様性」について考えている。この「質的多様性」としての「持続」とは、そこでのある要素が取り出された場合、その要素とともに他のすべての要素も一変してしまうような「質的変化」として考えられている。つまり「持続」とは、そこでの諸要素がそれぞれ輪郭を持たず、互いに外在化する傾向もなく、相互に浸透し合っている変化の継起を意味しているのである。したがって、「持続」においてはそもそも、そのなかの1つの要素を区別し、取り出すことじたいが不可能なのである。しかし、「持続」は均質的なものへと融合してしまうのでもない。均質的なものへの融合は「空間」の特性であった。これに対してベルクソンは「持続」を「純粋な異質性」と呼んでいる(Bergson 1889: 77＝1990: 99)。ここに「数的多様性」と「質的多様性」の違いが存在するのである。「持続」はつねに変化し、分化し続ける「差異化」の過程そのものを意味し、「空間」における対象とは異なり、同一のものとしてとどまることはない。したがって、「持続」においては異なったもののみが存在し続けることになるのだが、それらは複数のものとして存在することも、一になることもないと考えられている。つまり「持続」は「異質」なものであり続けるために一ではなく、複数とは「空間」における「軌跡」であるために複数でもないと考えられているのである。このような「持続」における「差異」とは、「空間」のなかの対象間に存在するものでも、また「空間」と「持続」の間に存在するものでもなく、それ自らとの間に存在するものとなる[6]。しかし、ここで「持続」の概念は問題に直面する。この「純粋な差異」において「自らとの差異」について語ることは、はたして可能なのであろうか。つまり差異を「自らとの間に」生じるとすること自体がすでに、「空間」を前提しているのではないのだろうか。しかし、逆にこのように問うこと自体、「空間」における対象とは異なる、「持続」の特異な存在を把握し損なうことになるのであろうか。

ベルクソンは「持続」を「旋律」を例に説明している[7]。ある旋律の効果は、今聞こえている（最後の）音によってもたらされるのではなく、継起的な楽音が「相互に有機化」され、「不可分な連続」として存在することによってもたらされる。ここでベルクソンが思い描いている「旋律」とは、縦と横にならべられた音を相互に結びつけ、また分離する「音程」という空隙によって構成された楽音の単なる寄せ集めではない。それは、それぞれ音の「響き」が連続的かつ有機的に結びつけられてゆく、旋律そのものの推移を意味しているのである。旋律と同じように「持続」も、先行する状態と現在の状態との間に境界、空隙が設けられることはなく、響きとして溶け合うことによって有機化されている。したがって、「持続」は「点」あるいは「現在」に還元されえないものとなる。「現在」とは「空間」においてのみ可能になるものだからである。

このように「持続」は、流れつつある旋律として存在し、はじめの音にもどることでも、過ぎ去った音を思い起こすことでもなく、次の音、さらに終わりの音を思い浮かべることでもない。つまり、それは「空間」のなかでの対象のようにある全体のなかでの位置において把握されることがないものとして存在するのであ

る。したがってベルクソンの「空間」とは、既に作り上げられ、記譜された旋律、「楽譜」として存在する作品であり、「持続」とは、「楽譜」でもその「再現」としての「演奏」でもなく、未だその完全な姿では存在していない旋律を創造しつつ演奏し続けること、さらにその旋律に耳をかたむけながらそれと一体化し、自らの作品を自らの内にとどめておくことを意味することになる。しかしながら、このように「持続」を「旋律」の推移として考えることで、既に「空間」の存在が前提にされているのではないのだろうか。「自然に」流れるようにみえる旋律じたい、多様性を秩序づける何らかの「空間」の構成に基づいているのではないのだろうか。

4 「点と線」

ベルクソンは以上のような「空間」と「持続」の関係を、「点と線」の例を用いて説明している[8]。動いている物質的な点が自己意識を持つとすれば、それは自らが変化していることを感じる。しかし自己意識をもつ動点が自らの動きを線、軌跡、自伝として把握するためには、「その動点がみずからたどる線の上方にいわば身を持ち上げて、線上に並んでいるいくつかの点を同時に知覚できる」ようにしなければならない。つまり「線を線の形で知覚するためには、その線の外に位置していて、それを取りかこむ空白があることを納得し、したがって3つの次元を持った空間」を考えなければならないのである（Bergson 1889: 77＝1990: 99）。動きそれじたいとして存在するものを、ある1つの対象の軌跡としてとらえるためには、それを「空間」上に位置づけるとともに、その「空間」という「枠組」のなかでの位置関係を「上方」から眺めることのできる視点に位置する必要がある。このことによって2つのユニテの綜合としての「数的多様性」の「空間」が構成されるのである。したがって、音の集合がある1つの「旋律」をなすものとして、つまり単なる無秩序な音の羅列ではなく、他のものへと逸脱することなく1つの方向に向かって進展してゆく、意味を持った響きの連続をなすためには（あるいは自らをそのようなものとして作り出すためには）、「空間」の存在が前提にされなければならない。このことによって、「旋律」は一貫したものとして進展してゆくことができるのである。

このように作り出された「空間」において、「空間」と異質なものは、そのなかでの場所を与えられることでそれ自体としての存在を与えられ、個別化される。つまり客観的なものとして、それ自体において存在することになる。対象は「空間」においてのみ「可能なもの」になるのである。このことによって、この「空間」とそれを眺めるものとの間には「距離」が作り出され、この「距離」によって「空間」を眺めるものは、自らの存在、自らの一貫性を脅かす異質なものから距離を保つことができるようにもなるのである。この「空間」ともっとも異質なもの、それは「持続」にほかならないのではなかろうか。そうであるとすれば、「持続」は逆説的なことに、「旋律」という自らの一貫した存在を脅かしさえすることにもなるのである。さらにこの「空間」の構成において、それを眺めるもの自身も「空間」に包摂されることになる。そもそも「空間」が構成されることになったのは、自らの動きを軌跡としてとらえるためであり、自らもそのなかに描き出されることがその構成の条件なのである。

以上のように、動きそのものは、軌跡を描く動点となることである1つの「点」の推移として、つまり対象として把握可能になるのである。ベルクソンは次のように述べている。「われわれの自我の変転を重ねる持続が等質的環境のなかに投影されることによって定着されるのと同様に、たえず変化するわれわれの印象は、それの原因である外的対象のまわりを幾度もめぐることによって、その明確な輪郭と不動性とを身に着ける」、これは「現実に記号を置き換え、あるいは記号を通してしか現実を知覚しない」こと、つまり「ニュアンスが1つの名に代えられる」ことである（Bergson 1889: 95-100＝1990: 120-124）。「持続」とはこの「ニュアンス」のことであり、この「現実」という「ニュアンス」は、「空間」における対象の「まわりを幾度もめぐることによって」、そのなかのある1つの対象として固定化され、同定可能なものになる。このことで逆に、その対象が、変化し続ける「現実」の客観的な原因であると見なされるようになるのである。

ベルクソンは「空間」の問題性を指摘しながらも、それが「社会生活」においては不可欠であると認めている。つまり問題は単に「空間」を否定するのではなく、そこにおいて失われるものについて、どのように

考えるのかという点に存在しているのである。「空間」という表面の論理において隠されてしまっている「根本的な不条理」、「名付けられる瞬間にはもうすでに存在をやめてしまっている無数のさまざまな印象の無限の相互浸透」(Bergson 1889: 99＝1990: 125) が存在しているのではないのだろうか、このことこそベルクソンが「持続」において問題にしていることなのである。

5 「主観的なもの」としての「持続」

ベルクソンは「客観的なもの」としての「空間」に対して、「持続」を「主観的なもの」とする。客観化されたものにおいては表わされえない「ニュアンス」、言葉にもたらされることで失われる「現実」、つまり「空間」を逃れる「持続」において「主観的なもの」を考えることがベルクソンの試みである。しかし、「空間」においては隠されてしまう「根本的な不条理」が、いったいどのようにして「主観的なもの」になるのであろうか。ここで問題は、「持続」が「主観的なもの」にされるという点にあるのではなく、このことがいったい「主観的なもの」のどのような事態を述べることになるのかという点にある。この問題を「質的進行」である「持続」の例としてベルクソンが取り上げている、「優美の感情」を例に考えてみたい。

ベルクソンによれば、「優美の感情」[9]とは、次にくるべき運動があらかじめゆとりを持って現われている、先の予見をゆるす運動、規則正しいリズムと拍子を伴った運動に対する「時間の歩みを止めて現在の中に未来を保つことの快感」のことである。この反復されるリズムと拍子によって、対象の「動きが予見できるようになり、こんどはわれわれが動きの主であるかのように思い込む」ようになる。つまり次の動きが予見できることによって、その対象は「われわれにしたがっているように見え」るのである。それはあたかも「われわれはこの想像の世界のあやつり人形をあやつっているかのようである」とベルクソンは述べている。予見可能性と支配の感覚との結びつき、例えばよく知っている曲を、よく知っている演奏で聴いているとき、次にくる音の動き、強弱、「ニュアンス」を知り尽くしていることで、その曲と一体化し、あたかも自らがその演奏者、あるいは作曲者でさえあるかのように感じること、この自らの手に「未来を保つことの快感」と安心感、自らが創造し、支配しているという感覚が「優美の感情」である。「持続」が「有機化」された「旋律」にたとえられるのもこのことによってである。

しかし、この「持続」についての例は、見方によっては「空間」について述べたものとして解釈することもできる。対象を既に馴染みの、反復されるリズムと拍子に従うものとしてとらえること、つまりそれをある「空間」に位置づけることによって、その動きは予測可能になり、「自然な」動きを描き出すようになる。予測のためには、推移を原因と結果の系列における線において表すこと、つまり「空間」においてとらえることが必要であり、このことによってそれを眺める者は、自らを「動きの主」と思いこめるようになるのである。したがって、自らの眼前に展開する対象の「動きの主」として「有機化」される「持続」とは、「持続」のリズムを乱すことがないように構築された「空間」の存在を前提にしているのである。これはベルクソンが述べていた点と線の関係にある。しかし、点と線の関係において「持続」と「空間」との区別はあいまいなものとなる。つまり、そこにおいて「持続」は「空間化」された形においてのみ自らを把握することが可能になるのである。この関係において、「主観的なもの」としての「持続」が「空間」とは異なるものとして現われうるのは、「空間」をその上から眺めることによって作り出される「空間」との「距離」において、それがあたかも創造主であるかのように感じられ、この「空間」において「持続」としての「優美の感情」を得ることができるためである。

このように「持続」は、「空間」をその上から眺める点に位置づけられると同時に、それ自体が「空間」のなかに描き込まれ、線を描いてゆく動点となることで、「空間」のなかの他の対象とは異なるものとして存在するものとなる。しかしそのための「持続」は「空間化」されなければならず、このため、すべてのものが「空間」を構成する関係のなかに、つまり「空間化」の過程とそこから生み出される「それ以上のもの」との関係において「客観的なもの」が構築される関係に包摂されるのである。しかしこのことによって、「持続」が「動きの主」としての「主観的なもの」になりうるのである。

以上のような「持続」についての「旋律」、「優美の

感情」の例において、「質的な差異」として考えられていたものは、「空間」の構成を前提にし、またそれ自体が「空間」における関係へと変化することがその構成の条件になっている。しかし、ベルクソンの議論の要は、「空間」の構成とは異なる論理について考えることにあった。このことは、単に「空間」を否定すること、つまり「持続」という何らかの存在を前提に、「空間」を否定することによっては把握することができない。さらに、存在するのは「空間」に包摂される関係だけであり、そこにおいて現われる、「より以上のもの」において「持続」を考えることもできないのである。「主観的なもの」としての「持続」と「客観的なもの」は、「空間」をの関係においてのみ存在しうるのだとしても、そこにおける「純粋な異質性」としての「持続」の位置が考えられなければならないのである。つまり、「自らとの間に生じる差異」ということにおける、「空間」のなかでの対象とは異なる「持続」の存在の意味を明らかにしなければならないのである。

6 「原因」としての「客観的なもの」と「自由」の概念

ベルクソンが批判しているのは、「純粋に内的な諸状態」を「客観的なもの」で測ること、つまり「空間」に位置づけられた「原因」によって「主観的なもの」を説明しようとする考え方である。この「主観的なもの」の「原因」を「客観的なもの」に求める過程において、いったいどのようなことが生じているのであろうか。それは、「原因の性質すら知らずして」、「結果の強さが［中略］原因の数や性質についてあえて仮定をたてさせ」ることだとベルクソンは述べている（Bergson 1889: 2＝1990: 16）。「主観的なもの」をもたらす「原因」を「客観的なもの」に求める過程において、この「原因」としての「客観的なもの」の性質は知られることがない。それにもかかわらず、「主観的なもの」によって与えられた尺度に基づいて、それは「主観的なもの」の「原因」として「主観的なもの」を測り、固定化することになるのである。だとすれば、ここにおいて生じているのは、「主観的なもの」によって想定された「客観的なもの」で「主観的なもの」が測られるという、「主観的なもの」のある種の循環的な過程なのであろうか。

この自らの尺度を用いているように思われた「主観的なもの」は、それ自身が「尺度」であることによって既に「空間」の存在を前提にしており、「主観的なもの」はその客観的な「原因」を求める過程においてはとらえられないままである。このためベルクソンはこのような考え方を批判するのである。しかし、この過程においてとらえられないままであるのは「持続」だけではない。ここでは「空間」自体もきわめて不安定な状態に置かれているのである。つまりベルクソンが述べているように、「空間」によって構成され、また「空間」を構成するための条件である「客観的なもの」の存在自体も、この原因を求める過程において把握されることがないからである。それは「主観的なもの」によって想定されたものであった。したがって、「客観的なもの」は、主観的なものとしての「持続」とともに「空間」においてとらえられないままであり続けるのである。

このように「空間」が構築される過程において、「主観的なもの」も「客観的なもの」も、それじたいの「原因」を把握することができないのであるが、「空間」はこのことを隠蔽することにもなる。それは、「質的な差異」が失われ、常に不十分なものでしかありえない「空間」、つまり「空間化された時間」において、ある「自由」の概念が作り出されることによってである。「外的現象のあいだに数学的内属関係があると考えることは［中略］人間の自由に対する信念を生じさせるに相違ない」（Bergson 1889: 158＝1990: 192）。動きが「空間」上の軌跡に翻訳されることによって、時間は「あった」ものとしてとらえられる。そこにおいて、未来は現在という点から分岐してゆく無数の選択肢として描き出され、これらの線のまわりには線が無数に分岐してゆくことのできる、またそうすることができたはずの「空白」が広がって見える。このためベルクソンは次のように述べるのである。「無限の可能性でふくれあがった未来の観念は、未来そのものよりもいっそう豊かであり、そしてそれこそ、所有よりも希望に、現実よりも夢に、よりいっそうの魅力が見いだされる理由である」（Bergson 1889: 7＝1990: 22）。

しかし、これらの選択肢は「空間」として構成された過去が未来へと投影されることによって作り出されたものでしかなく、それは過ぎ去ったものしか示すことができないのである。［空間化された］「この図形は

果たされつつある行動ではなく、果たされた行動を私に示している」(Bergson 1889: 135＝1990: 166)。つまり、他のようにありうること、多様な選択肢が眼前に広がっていることにおいて、「質的な差異」としての自由を求めることは不可能になる。このことからベルクソンは自由を「空間」にではなく、「持続」に求められるべきものと考え、「自由は行動そのもののあるニュアンスあるいは質の中に求められるべきもので、この行為と、この行為ではないものあるいはこの行為がなりえたかもしれなかったものとの関係の中に求められるべきではない」(Bergson 1889: 137＝1990: 168)と述べるのである。そして、この「持続」における自由を、創作における芸術作品と芸術家との関係にたとえている。「行為が全人格から発し、それを表現し、人格に対して、芸術作品と芸術家とのあいだの関係にしばしば見いだされる、例の定義しがたい類似を持つ場合に、われわれは自由なのだ」(Bergson 1889: 129＝1990: 159)。

7 「空間化」

以上のように、「持続」が自ら進展する「旋律」として「主観的なもの」となりうるためには「空間」の存在が前提になる。一方で、ベルクソンは「持続」を「空間化された時間」、つまり「空間」においては存在しえない「自由」に位置づけようともしている。この「持続」の両義性はどのようにして生じるのであろうか。

既に述べたように、ベルクソンの「客観性」の定義から、「空間」のなかでの対象には常に現にあらわれている以上のものが存在し、その把握は不十分にならざるをえない。しかし、このことによってその対象は客観的存在を与えられるのである。つまり「空間」に位置づけられた対象は、不十分であるとしてもそこにあらわれていることにおいて、必ずその十全な姿において、この「空間」のいわば外に存在するはずのものになるのである。このことが「空間」が構成されるための条件である。しかし、「空間」を「空間」として作り出すためには「持続」が不可欠であるともベルクソンは述べている。「われわれは、区別ある多様性の観念を形成するのにも、質的多様性と呼んだものを平行的に考えることなしにはすまぬ」(Bergson 1889: 91＝1990: 115)。

それでは、「持続」は「空間」の構築においてどのような意味を持つことになるのであろうか。「空間」に位置づけられた対象についてベルクソンは次のように述べている。「最も取るに足らない出来事（中略）それが重要さをもたないと仮定してみても、それを無意味だと判断できるのは終極の行為との関係においてであり、しかも終極の行為は仮説によって、あたえられていない」(Bergson 1889: 141＝1990: 173)。対象の意味を明確なものとするためには、それに「空間」における位置を与えなければならない。しかし、その位置を固定化する「終極」は「仮説によって」与えられることはない。つまり「空間」における対象に「全体」(ユニテ) のなかでの固定的位置を与えることは、「空間」の全体はけっして与えられることがないため、「空間」それ自体においては不可能になるのである。しかし、「主観的なもの」が、この「空間」を構築する関係のなかに存在することによって、「原因」が常に求められ続けることになり、この過程において「時間」が「空間化」されることで、与えられることのない「空間」の「終極」があらわれることになるのである。したがって、「主観的なもの」と「客観的なもの」は、この「空間」が構成される「空間化」の過程において存在することになるのである。

このように「主観的なもの」と「客観的なもの」には、ともに「空間」においてとらえられることがない側面が存在することで、「客観的なもの」にも「持続」的側面が存在するとも考えられるのだが、これらの存在の仕方は異なっているのである。「空間」における対象はそのなかに位置づけられることで、「それ以上の」客観的存在を得る。しかし、「持続」は、「空間」に位置づけられることがその消失を意味しているのである。したがって「持続」は、「空間」のなかの１つの対象としても、また「空間」によってもたらされる「それ以上の」ものにおいて存在することもないものとなる。つまり、その原因を「空間」に求めることはできないのである。しかし、これと同時に、「純粋持続」においても、「主観的なもの」としての「持続」は、それ自体としての一貫した存在を失うことになるのである。このことが、「持続」は自らとの差異において存在するということの意味である。「持続」は実体でもなければ、１つの流れとして存在するのでもなく、そのようなものを否定するかたちで存在するのである。このために

「持続」は、「空間」の存在を前提にし、いわばそのなかに住まっているのであるが、それは「空間」によっては把握されることはありえないものとして存在し、逆に「空間」の構成を可能にするものとして存在することになるのである。

以上のようなベルクソンの数的多様性としての「空間」にかかわる議論は、フーコーが分析している軍隊の陣営をモデルにした都市あるいは国家の格子縞型に分割された空間、遠近法的に構築された空間、音楽における調性の空間といった、近代の諸空間を考えるうえで重要な意味を持っているのではなかろうか。空間に改めて焦点があてられることになったのは、近代の時間、つまり進化論的な時間という均質的空間を含意した時間が問題になることにおいてである。しかし、ベルクソンの議論から明らかになるのは、そのような空間に対して、単に多様性を対置させればいいのではないということである。ある種の多様性は、均質化された空間においてのみ可能になるからである。それでは、多様性についてどのように考えることができるのであろうか。それを「空間」の外にある質的なものに求めることはできない。というのも、そのような考え方じたいが、まさに「空間」の構成に基づいたものだからである。それでは、「空間」を単に否定するのではなく、まさにその構成の条件を考えることで、その限界を、つまり「空間」とは異なった多様性の可能性を明らかにすることができるのではないのだろうか。ここに「持続」について問いの意味が存在しているのである。

[注]

1) Henri Bergson,1889, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 156e édition,1985,Presses Universitaires de France (＝1990,平井啓之訳『時間と自由』白水社.)

2) ここで、アンソニー・ギデンズの社会理論についていくつかの点を指摘しておきたい。ギデンズの社会理論を、時間（あるいは空間）の問題を通してとらえ直すことで、そのモダニティ論との関連がより明確になる。そこにおいて最も重要になるのが「時間·空間の開離化（time·space distanciation)」の概念である（「開離」の概念についてはハイデッガーの『存在と時間』の第23節「世界＝内＝存在の空間性」、細谷貞雄訳を参照)。「時間·空間の開離化」の概念に関しては、1979年の『社会理論の中心的諸問題』と1990年の『モダニティの帰結』を現前／不在の問題から読み直すことが重要であるように思われる。ギデンズは自らの時間と空間についての議論がハイデッガーに依拠していると述べているが、「社会的存在論」の名のもとに「存在論的差異」というきわめて重要な問題を避けて通っている。

ギデンズの一連の著作の中でも時間と社会理論の問題を論じたものとしては、特に1976年の『新しい社会学的方法の基準』(1993年第2版）と1984年の『社会の構成』が重要である。前者において「持続」の問題が行為論の側面から論じられており、後者ではそれが日常的実践と長期持続という時間（さらに空間）の次元に結びつけられることで「構造化理論」が展開されている。ギデンズがこのように時間の問題にこだわるのは、例えばそのフーコーへの批判において述べられているように、構造から主体を救い出そうとするためである。これが「二重性」ということで問題にされていることでもあるのだが、そこにおいて「他のようにもありうる」という、時間の特性が重視されている。しかしながら、ベルクソンが「時間の空間化」ということで問題にしたのは、このような空間化された時間概念にほかならないのである。

3) 2つの多様性については『時間と自由』第2章参照。

4) 「数」についての議論は『時間と自由』(1889: 56-64＝1990: 75-82）参照。

5) ベルクソンの客観性と主観性の定義は『時間と自由』(1889: 62＝1990: 82）参照。

6) 「自己に対して差異を生ずるもの」としての「持続」については、ジル・ドゥルーズの『差異について』(平井啓之訳、青土社、1992）および『ベルクソンの哲学』(宇波彰訳、法政大学出版局、1974）参照。

7) 『時間と自由』第2章参照。

8) 「点と線」についての議論は『時間と自由』(1889: 77＝1990: 99）参照。

9) 「優美の感情」に関する引用は『時間と自由』(1889:9-10＝1990: 24-25)参照。欧文タイトル："Durée"and"Espace"